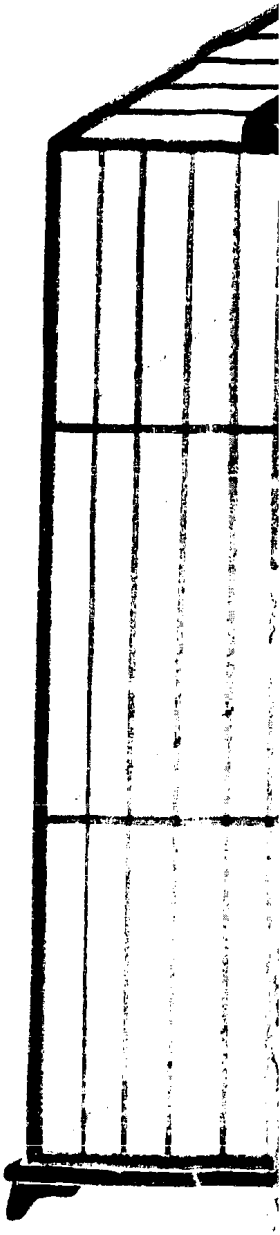
鞍馬天狗

天狗廻状

大佛次郎

天狗廻状

大佛次郎



光風社

昭和三十九年八月十五日　印刷
昭和三十九年八月二十日　発行

定価　三二〇円

著者　大佛次郎
発行者　豊島清史
印刷者　染谷秋雄

発行所　株式会社　光風社
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話　東京(291)〇二三八番
振替　東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします

鞍馬天狗
天狗廻状

目

次

山門　七
待ち伏せ　一四
朝　二六
木幡の殿　三三
薄むらさき　三五
口紅　四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宗像近江守　一三
犬　一四六
双面　一六一
反転　一八九
旋風　二〇八
烟塵の中　二五五

装幀

佐多芳郎

天狗廻状

山門

雨に追われ知恩院の山門へ駈け込んだ侍がある。大屋根の下へ飛び込むかいなかに、それまでにも夕方のように暗くなって来ていた宙に、雨はさーっと音を立てて滝のように白く降りそそぎ始めた。

その男は、あきれたように目をあげて、雨の勢いでゆさぶられている松の梢を見上げた。二十ばかりの、まだ若い、きれいな顔立である。色も白い、鼻筋もとおっている。町を歩いていても目立つ男振りであろう。このころの、京の侍たちの間に流行の生平は、いったいに男の顔を浅黒く見せているが、この男はそれを着ていて、いちじるしく色が白く見える。髪を講武所風に結んでいるし、これは江戸から上って来たのに違いない。近ごろ京にふえた浪人の仲間でもないらしい。身なりもきちんとしているし、品のいいところが、素姓の正しい家の者らしく考えられる。

雨はますますはげしく降って来た。この山門から西、石段の下に、はるかにひろがって見える京の町がすっかり隠されたことも無論なら、すぐ背後に、かぶさるように近い東山の若葉が鬱蒼と重なり合っている姿さえ、頂きのあたりまで雲がおりて来ていて、白い雨足の中にかすんでいる。

「困ったな」

と、若者は気短かそうに呟いた。

庫裏は近い。そこまで走って行って休ませてもらおうか、若者はこう考えたところだった。境内の敷石道を傘をかしげて急ぎ足に、この山門へ来る者がある。

傘の下に明るい笑顔が見えた。遠くから若者を見て、傘があっても役に立たない雨の強さを笑ったものであろう。廂の下へ飛び込むと、傘をつぼめて、雫を切ってから、

「ひどい降りです」

と、声をかけて来た。

立派な武士である。

若者も笑いかけながら、

「驚きました」

と、答えた。

「私はまた傘もないので」

「いや、傘があってもいっこう役に立たない」
歯切れのよい江戸の言葉である。若者が見たところでは三十五、六の、男ざかりの立派な武士である。上布の白絣に紹の羽織を着た夏姿が、さばけて意気な感じを与えた。この男となら話も楽にできそうに思われる。
「京の夕立は、いつもこんなに強いのですか？」
と、若者は言った。
「京の夕立？」
武士は目をあげた。若者のとっぴな問いに微笑を感じたらしい。
「江戸の方ですな」
「ええ、昨日参ったばかりです。今日は見物して歩いていると、この降りでした」
「それはお気の毒だった」
と、武士は答えた。
「しかし、今日は朝からむしむしして、いやな天気だった。降ってくれてよかったのです。すぐやみましょうから」
「やみましょうか」
「一ときだけです。後が涼しくなっていい。まったく、ここの夏の暑さだけはやりきれないものだから」
そう言ってから、
「なるほど、京のものは夕立でもやさしかろうと考えられたか」
と、はれやかに笑って見せた。こだわりのない、聞く者にも愉快に感じられる明るい調子である。
「して、京は、ただ名所を見物にお上りなされたか？」
「いや」
と、若者は答えた。
「見物だけではないのです。知人を頼ってまいったので……」
この返事は、あまり、はっきりしたものではなかったが、たずねた方でも、それ以上深く訊こうとはしない。ただ何か自分一人で感じたことがあるように、雨を眺めていた目の色を、明るく微笑させて、
「江戸の方がだいぶ京へ上って来られる」
と、呟くように言った。
雨の音は強かった。しかし、この男が言ったとおり、間もなく晴れようというのはほんとうかも知れない。雲が動き、八坂の塔のあたりがぽっと明るくなって来ている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あなたは……」
と、若者は問いかけた。
「失礼ですが、やはり東国の方のように思われますが」
「そう見えますか」
と、武士は、浅黒い男らしい顔を振り向けて笑った。
「もっとも私は江戸に十年浪人暮らしをしていた。今も相変わらず碌々としていることには変わりがない」
淡泊でのんきな気性らしい。初対面の見も知らぬ男にこう話して、自分も愉快そうな顔色である。世間には黙っていても、人に明るく感じられる種類の人があるが、この男などは確かにその一人らしい。浪人といえば、すぐみじめな顔つきを思わせ、自分の境遇の不幸な心持を他人にまでうつそうとするような、とげとげしたのが一般なのに、この男にはそんな卑屈らしいところは毫も見えないし、身なりだって、きちんとしている。
「十年」
と、若者は、驚いたように目を上げた。
「そんなに長く浪人していられて……御不自由なこともなかったのですか」
「不自由だらけでした」
と、武士はまた笑った。
「けれど、慣れましたからな。傍で見るほど悪くはないのです。時々考えるのだが、直参の小身の方より、体面を考えずにすむし、かえってのんきなのじゃないかな。自分でそう思い上っているのだからいい。ははははは。失礼だが、あなたは直参の方ではないか」
若者は白い顎をうなずかせて、ちらと暗い表情を目に見せた。
「そうなんです。今あなたのおっしゃった貧乏旗本の三男、どうにもならない身分です。京へ上って来たのも、同じような友達が大勢来ているし、どうにかなるだろうと思ったからです」
この言葉には若者らしい誇張が幾分感じられたが、ごく正直な話らしく、すなおな心持が相手の胸にも感じられた。
武士は、若者の顔を見守った。その目の色に、弟を見守る兄のように優しいものがあった。
「あなたのお友達というのは、こちらで何をしていられるのか」
「新選組や見廻組に加わっている者が多いのですが」
「すると、あなたも、その方にはいられないとも限ら

ない」
「まあ、そのつもりでいるのです。自分では新選組にはいりたいと思っているのですが……」
「結構でしょう」
相手は、こう答えて黙り込んでから、空を見上げた。
雨はとうとう上って来た様子で、この辺は、まだぽつぽつ降っているが、西山が明るくなり、急にかっとまぶしく、日の光がさして来た。しずくをためた松の葉がきらきら光っている。
「上りましたな」
と、二人は明るく言った。
桶をつたわって、水が石段の脇の傾斜の急な溝を走り落ちている。二人とも気がつかないでいたが、この楼門に雨やみしていたのは、この二人だけではない。もう一人、片蔭の軒下に、壁に平たく身を寄せて立っていた、ひそかにこちらの様子を覗いていた男がある。遊び人風の、目つきの鋭い男であった。
その男の視線は、侍たちが並んで石段をおりはじめたのをずっと見送っている。
京の盛り場でこの男の顔ならば相当に売れていた。細手を上ったところで、煙管屋をしているせいか、煙管の親分とは誰が言い出したものか、屋号は室口で、長次といって十手を預かっている。
（見た顔だ。どこの誰だっけ）
長次の視線が追っていたのは、若い方の侍ではない。なお細かく降る雨に傘をひろげて、若者を入れてやったやや年長の侍の方である。
笑った横顔は確かに見覚えがあった。
はっと、思った。
「蔵馬天狗」
大げさにいえば雷に打たれたような、驚き方であった。それもそのはず、この奇怪な名前ならば、今、京で壬生浪人といわれる新選組の猛者、近藤勇や土方歳三のような頭目株の者でさえ、真剣な気持にさせずにはいない、幕府の敵だからだ。どこの生まれで本名は何というのかもわかっていない。こういう人間がいると知れわたった時が、もう蔵馬天狗という名前で、新選組、見廻組の向こう見ずな壮士たちの胆を寒からしめていた。その名のとおり神出鬼没の行動で、京のどこに潜んでいて、何時現われて出るかも予測できない疾風迅雷のような働きを示した男である。
（違うだろう、この真昼間に）

京にある幕府の諸機関が血眼で探し廻っていた男だ。新選組、見廻組では、見つけ次第有無をいわせず斬るよりほかはないと申し合わせ、内々で守護職からこの男の首を取った者に賞金を出すことになっているという噂さえある。その人間が、公然と白昼の町を歩いていようとは考えられない。ことにこの数カ月まるで噂が絶えて、――きょう日では目ぼしい浪人者が姿を見せなくなったら、おおかたどこかで斬られたか、牢へはいったものと見てよいのだから、生死のほども疑われていたくらいなのが、忽然とここへ現われた、とする。京の町へだ。新選組、見廻組が、また目の色をかえて出て来る。そうだろう。これはこっちで狙わない限りは、逆に狙われるのだ。自分たちの命が、いつなくなるかわからない危険にさらされるわけなのだ。

長次は、わくわくして来ていた。

（確かだ。彼奴だ）

もう駈け出すばかりに、裾もつかんで、はしょってある。後を尾けるのだ。どこに隠れていやがるか。それが分るだけでも、どこへでも注進して出れば大手柄だ。

（見つかってはならない。

そっとだ。そっと、分らねえように。

笑ってやがる。

何を話していやがるんだか。

こっちを向くんじゃあるめえな）

青蓮院の石崖の下を通って、粟田口から三条へ来ている東海道へ出る道だ。両側から枝をのばした木が鬱蒼としていて、今の雨の名残の水玉を、地面へ重くしたたらしている。

（おっと……傘をつぼめやがった）

南禅寺の山から、叡山のあたりまで、雨にぬれた町家の屋根の空に、かっと日ざかりの光が当って、緑の襞がくっきりと明るかった。その辺に雨やみしていたらしい物売りも出て、京の町らしいのんびりした声を路地に聞かせている。

どうも、おかしい。

あまり平気すぎる。せわしい人間らしくもなく振り返って後を見ることもない。

（人違いじゃないのか？）

それとなく、長次は足を早めて追いついて行った。多少、おっかなびっくりな心持だったが、――度胸は人並みだし、また何といっても、真昼間の町のなかな

のが、何よりも心強い。
笑いながら、その侍が、長次の目の前で振り向いて立ち止まった。
はっと身体がすくんだのだ。
「御苦労だな」
まぎれもなく、鞍馬天狗の笑顔だった。
「変わりはないか。まことに久し振りだ」
と、鞍馬天狗は笑いながら言った。
連れになっていた若者は、何も知らずに、離れて立っている。
長次はやっと笑い顔を作った。
「やはり、旦那でしたか？」
「ははははは……」
鞍馬天狗は、心から愉快そうに笑った。
「旦那にしてくれたな。結構だ」
「どこかへ、行っていらしったんで」
「そうだよ。昨日帰って来たばかりのところだ。まだ、どこにも顔を出してない。お主に会うのが最初だろう。そうだな、お主から古い仲間へ、ふれを廻しておいてもらおうか」
「御冗談」
「壬生へも、ちょいちょい行くのか」
壬生とは、そこに屯所のある新選組のことであろう。近藤勇やその他の猛者たちに、鞍馬天狗を見たと知らせたら——もちろん、長次はこれからそうするつもりでいたのだが——どんなに驚くか。その鞍馬天狗と思いがけなく親しく話してみて、長次は楽しみなような心持さえした。
「相変わらずですなあ、旦那」
「なにが？」
鞍馬天狗は破顔した。
「相変わらずといえば、何もかも相変わらずだ。さっそく、おれの供をするつもりらしいな」
「いいえ、もう……」
長次は、気楽に言うことができた。
「出直しますよ。こんにちは、いけません。人のいない淋しいところへ連れて行かれて、ばっさり笠の台が飛ぶのじゃァ……」
「ははははは、帰るのか」
「見つかってはね」
「俺はまた、邪魔になった傘を持って行ってもらえると、喜んでいたんだが……」

「いいえ、また、いつか」
「出直すか」
笑いながら、待っていた若者の方へ目で会釈をして歩き出した。
長次はぼんやりしてそこへ取り残されていた。
(なんて！)
大胆とも不敵とも。——呆れて見送るだけだ。
お供しますと答えたら、傘を持たせてついて行かせたろうか、と思うと、そう言わなかったのが惜しいような心持がする。まさか、どこへ隠れていやがるのか、行く先まで連れて行くはずもなかろうけれど、あの機嫌なら、乱暴なことをするようなこともないかも知れなかった。
それはそれとして、鞍馬天狗がまた出たとは大騒ぎだ。どこへ行っていて、また、何をして帰って来たのか、とにかく、これは方々へ知らせなけれァ……
長次は、それからまたと、振り返って見ようともしないこの恐ろしい男の後から、いくらか遠慮がちに、のこのこ歩き出した。
すると、鞍馬天狗は三条の橋まで来て、連れと別れてから、道を折れ、柳の青い川について上って行くのだった。
(そうだ、近藤さんや土方さんが、またやっきになって追い掛ける。見廻組だって黙って見てはいないだろう。あんなのんきな面をしているが、今度はどうなるかわからねえぞ)
長次はそう考えながら、橋を渡って行く若者の方へ視線を走らした。

待ち伏せ

夏の月が中空にかかっていて、物の蔭が黒い。三人連れの武士が川端を歩いて来た。先斗町あたりの川に突き出した涼み座敷の灯を連ねて、三条の橋が柳の蔭から現われた。

「もう三条へ出てしまった」

と、一人が言った。

腕を肩までまくって、勇ましく見えるが、これは宵の蒸し暑さのためばかりではない。これは壬生の新選組の男たちだ。

「広くはない町だから、江戸のことを考えちゃならんよ」

と、もう一人が笑った。

「しかし、長次の話からして漠としているな。三条から上というだけでは、甚だもって心もとない」

「俺たちの探し方もあまり利口の方じゃァないぜ」

こう言ったのは、三人の中で一人だけ上布の着流しで、すらりとした姿勢の優形の男であった。

「もぐらじゃあるまいし、一ぺん通った道だからといって、二度通るかどうか、こいつァ、少し考えもんさ。能なく汗をかきに歩いたようなものだ。見栄えのしない役さ」

「しゃべるな」

と、腕まくりが、短気らしく言った。

「けれど、……まったく、当のない探し物だ」

「先さまも足があって歩いているんだ」

「天狗だから羽があるのかも知れん。どっちみち、もう歩くのは愚だな。なんという暑さだ。出ればいい。出れば涼しくなるがな」

「化物を待っているような話だ。けれども、やりたい。他人の手に譲りたくはない。まだ宵の口ではないか」

話し声は橋の上に移った。一人が欄干にもたれて磧をのぞき込んでいる。水は月影を流してきらきらしている。

「ちっとも風がない」

と、誰か言った時、腕まくりの男が相変わらず重い口調で言った。

「どうも、俺ァ考えるが、これは市中ではないな。市

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com